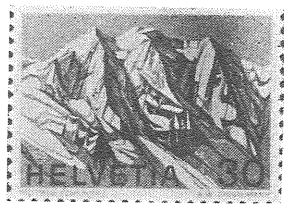




スイスの自然と人々

(その1)

星野一男



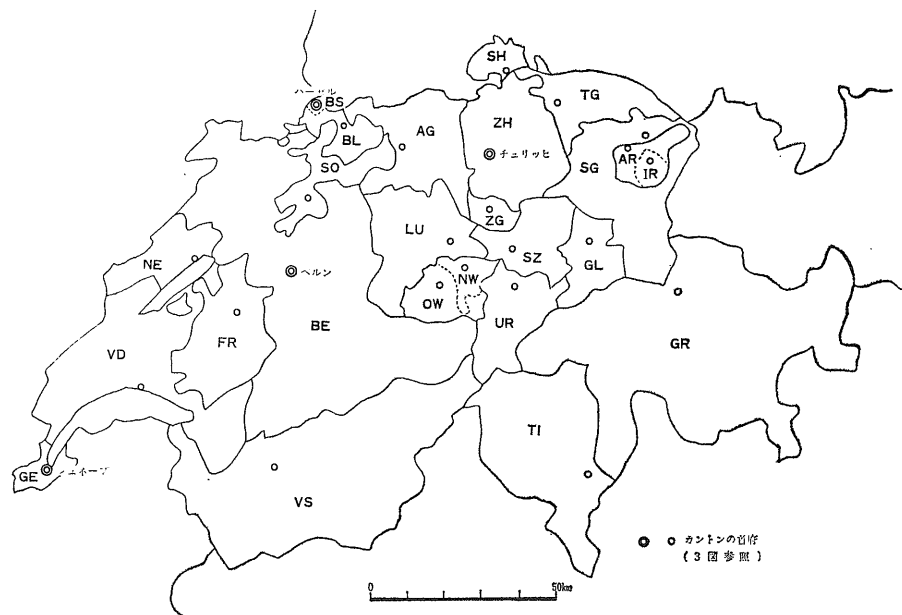
第1図 アルプスはスイスの象徴である。スイスの切手にはこの国の古名であるヘルベチアの呼称がすべてに記される。それぞれ サンモリッツに近い Piz Palù (3,905m) (A) とシオンの谷の北にそびえる Les Diablerets (3,210m) を模したもの。

1 ま え が き

日本の若い人にとってスイスは最も人気のある外国であるという。 “美しい自然と平和を愛する人々” というイメージを誰でも持つようだ。 たしかに このイメージはウソではない。 スイスの自然は有名なアルプスを抱き 全土がそのまま ヨーロッパの公園といっても過言ではない。 旅人や見知らぬ人に向けられる暖かい微笑はスイスに少しでも足を入れた人は必ず持つに違いない体験であろう。 だが スイスに長く 少なくとも半年以上住んでいる日本人は例外なく言うのである。 「スイス人さえいなければスイスは世界一良い所だ」。 この感想も偽りではないと思う。 私自身スイスで2年近く過しているが 人からスイスはどうでしたかと聞かれば やはりこのように答えるだろう。

では スイスは住みにくい国なのか。 そうだと単純に答えれば であらめな思いつきを言うなと私自身の別の声がささやく。 この美しい “楽園” は私が日本で想像していたより はるかに複雑な要素を持った国である。 ある意味では日本以上に。 わが九州よりもせまい国に4つの異なった言語を話す人々が住み 各家には

実包20発を常備した最新鋭の小銃を具えながら この何百年来 外国とも 国内でも銃火の争いの見られなかった国。 ドイツ フランス イタリア オーストリーのように中世以来1くせも2くせもある強国に囲まれたながら独立を立派に保った国。 これがお伽話の世界ではなく 現実の世界の事であれば このような奇蹟を可能ならしめている人々は多くの秘密を持っているのが当然の事なのだろう。 私達地質家にとってスイスと聞けばまずアルプスである。 ヨーロッパの屋根であり 聖地であるスイス・アルプスは古典的地質学が育くまれ 成長した所である。 地理的条件に恵まれたスイス・アルプスは近代的地質学の対象としてなおその魅力を失っていない。 2年間の生活体験がこの神秘の国からどの程度にパールをはぎとれるか 私自身心もとないが “美しいアルプスの国” でのさまざまな印象と絶ちがたい愛着をもとにその自然と人々の素描を試みてみよう。



第2図 スイスの行政区分図。略号は 第3図に示したカントン(州のようなもの)の名を示す。



第3図 25のカントン 準カントンは由緒ある紋章を持っている。

表1 スイスのカントン一覽 総数22のカントンがあり うち3は2つづのより構成されている。

| カントン | 略号 | 加盟年 | 面積 km ² | 人口 1970×1000 | コミュニ オン数 | 首府 | 備考 |
|----------|----|------|-----------------------|-----------------|-------------|-----------|--------------------------------|
| チューリッヒ | ZH | 1351 | 1,728.9 | 1,099 | 171 | チューリッヒ | チューリッヒの人口 423,743 |
| ベルン | BE | 1353 | 6,886.9 | 1,001 | 492 | ベルン | ベルン 165,600 |
| ルツェルン | LU | 1332 | 1,494.4 | 282 | 107 | ルツェルン | |
| ウーレリ | UR | 1291 | 1,075.2 | 35.5 | 20 | アルトドルフ | |
| シュウイッツ | SZ | 1291 | 907.8 | 85 | 30 | シュウイッツ | |
| オブワルデン* | OW | 1291 | 491.8 | 25.1 | 7 | ザルネン | ウンテルバルデン |
| ニドワルデン* | NW | 1291 | 273.9 | 25 | 11 | スタンス | |
| グラールス | GL | 1352 | 684.3 | 42 | 29 | グラールス | |
| ツーク | ZG | 1352 | 238.7 | 67 | 11 | ツーク | |
| フリブール | FR | 1481 | 1,669.9 | 174 | 284 | フリブール | |
| ソロツルン | SO | 1481 | 791.2 | 227 | 131 | ソロツルン | |
| バーゼル市* | BS | 1501 | 37.1 | 235.4 | 3 | バーゼル | バーゼルの人口 214,005 |
| バーゼル府* | BL | 1833 | 428.1 | 200.9 | 74 | リースタル | |
| シャフハウゼン | SH | 1501 | 298.4 | 72.5 | 34 | シャフハウゼン | |
| 外アペンゼン* | AR | 1513 | 242.6 | 50.5 | 20 | ヘリザウル | |
| 内アペンゼン* | AI | 1513 | 172.4 | 13.4 | 2 | アペンゼル | |
| サンクト・ガレン | SG | 1803 | 2,015.8 | 376 | 90 | サンクト・ガレン | |
| グラウビュンデン | GR | 1803 | 7,108.9 | 146 | 220 | クール | |
| アールガウ | AG | 1803 | 1,403.6 | 420 | 232 | アーラウ | |
| ツールガウ | TG | 1803 | 1,006.4 | 186 | 199 | フラウエンフェルド | |
| テッシン | TI | 1803 | 2,811.0 | 240.4 | 253 | ベリンゾーナ | |
| ヴォ | VD | 1803 | 3,210.7 | 505 | 386 | ロザンヌ | |
| バレ(ワリス) | VS | 1815 | 5,231.0 | 187 | 168 | シオン | |
| ノイシャテル | NE | 1815 | 796.7 | 166 | 62 | ノイシャテル | |
| ジュネーブ | GE | 1815 | 282.2 | 324.3 | 45 | ジュネーブ | ジュネーブの人口 140,657 |
| 計 | | | 41,287.9 | 6,184 | 3,080 | | 平均人口密度 150人/km ² |

* 準カントン

2 国土と住民

スイスの総面積は 41,288km² で九州よりやや小さい。人口は 620 万。国土の面積は日本のほぼ10分の1であ

るが人口は20分の1に近い。すなわち人口密度は日本の約2分の1であるが この国を旅行すると日本よりもはるかにゆったりした感じを持つ。これは日本のように人口が大都市に集中せず 適当に分散しているからであろう。スイス最大の都市チューリッヒですら人口は50万弱に過ぎない。

スイスは 連邦政治制をとっており 全土は22のカントン(Kanton 便宜上州と呼ぶ)に分かれる。そのうち3はさらに2こづつの半カントンに分かれているからこれを含むと25の州に分かれているといえる。各州は3図に示すような州の紋章を持っている。スイスの州はおそらく 連邦政体を探っている世界諸国のうちでどこよりも強力な

独立制を持っている。ごく大ざっぱにいて軍事と外交をのぞいて 各州はそれぞれ独立した権限を持っておりそれぞれの憲法と政府と議会を持っている。州はコミュ



第4図 カントンの紋章は 地方分権意識の強いスイス人にとって日常あらゆる機会に使われる。これは乗用車のプレートに使われる。CHの赤字は、ドイツ語でスイス国境の車に使



第5図 筆者の住んでいたコミュニオン(市町村の如き単位)はチューリッヒ市の郊外10km。人口約2,000人のスイスとして平均的なコミュニオンであるが、これはその町役場のような役所を擁

ーン (Commune ドイツ語地域では Gemeinde と呼ばれる。市町村にあたるがこれでは印象が薄れてしまうので 以下もコミューンあるいはゲマインドのまま使わせていただく) より構成される。コミューンはむしろ共同体と訳した方がよいであろう。スイスの州と共同体 それは筆者の知るかぎり単なる行政単位の大 小という概念で捉えられるものではなく スイス独自の役割りと意義を持っている。この実態を正しく理解しないとスイスというものは分からない。このことはあとで機に触れて詳しく説明したいが 差し当っての理解の一助として著者の体験を述べてみよう。

スイスに3カ月以上滞在する外国人は特別許可が必要である。スイスの経済は戦後非常に活発になってきて人手が足らず それをイタリア スペインなどの移入労働者で補っているが 最近ではこれら外人労働者が全人口の15%にも達する勢となったために複雑な波紋を各方面にまきおこす結果となり スイス連邦政府は長期滞在外国人の流入を制限すべきか否かで1969年に国民投票にかけたが僅小の差で制限案は否決された。しかし以後特別許可を得ることは非常にむずかしくなっており 著者の場合も関係教授が何回も関係機関に説明しなければならなかったという話をあとで聞いた。所でこの許可証を発行し 外国人滞在者に関する事務を行なうのは連邦政府ではなく 各州の外国人警察部 (Fremdenpolizei) なのである。スイスに入学した長期滞在者は入学前に居住しようとする州警察から許可証をもらわなければな

らない。そして入国後7日以内に居住地のコミューンに住所 入国月日を届け出る事が義務とされている。

入国早々 これは絶対に忘れるなどいっしょに研究をすることになった教授から念をおされて 新しい住所に落ちつくとすぐ近所の人に教わって 届け出をなすべき “役場” におもむいたとき その建物の正面にはっきりと書かれてあった “Gemeindehaus” の看板を見た印象は非常に強烈でこの印象 すなわちスイスの印象として滞在中つねに離れることはなかった。ゲマインド 町とか村ではない単なる人口の集中個所ではなく 住民の主眼的表現を示すのだという強固な意志がその文字から発散しているようであるほどこれがスイス・デモクラシーなのかと感じた次第であった。

スイスには全国を通じて3,080のコミューンがある。平均して約2,000人が1つのコミューンを形成している。スイス連邦は 1つの国であると思っていると実態を誤るおそれがある。それは25の州の連合以外の何ものでもないのである。このニュアンスをよく理解しておかないと スイス・デモクラシーを理解することはむずかしい。スイス人自身が言うようにスイス連邦の国民は3重の国籍を持っている。すなわち まずコミューンの一員であり 州の住民であり またスイス連邦の国民なのである。

スイスには現在4つの言語区がある。東半分ではドイツ語系 (スイス・ドイツ語といわれ いわゆる高地ドイツ語の一派といわれているが 実質は非常に違って



第6図
スイスの言語分布図

る) 西部がフランス語 南部がイタリア語 そして東南の1部にレート・ロマン語(ローマ時代に由来するものでラテン語系)がある。これらの4言語地域はそのままスイスを構成する4つの大きな社会を反映している。4言語ともスイス憲法で国語として認められているが中央政府からの文書をはじめとしてスーパーマーケットのあらゆる商品に至るまでドイツ語 フランス語 イタリア語の3言語が併記される。レート・ロマン語は今日ではほぼ5万人くらいの人しか話さずであるが連邦政府はこの言語区を保存するためにいろいろな保護を与えている。

3 ヘルベチア—古代スイス

西暦紀元前 スイスの地にはヘルウェティー族といわれるケルト系の人々が棲んでいた。有名なシーザーのガリア戦記は紀元前58年から51年にかけて行なわれたローマ軍によるガリア(今のフランス)遠征を記録したもののだがこの戦争の発端を開いたのがヘルウェティー族である。2千年前のことであるがヘルウェティー(Helvetii)の名はヘルベチアとしてスイスの別称にも使われ(カット) またアルプルのナッペ構造で有名なヘルベチア帯としても使われてわれわれにもなじみが深い。ヘルウェティーとシーザーの物語は今日のスイス人を理解する上で非常に示唆的なので冗長にはなるがガリア戦記の冒頭から多少抜すいしてみよう(引用部分は近山金次訳 岩波文庫より)。

当時 ヘルウェティー族の領地は北はユラ山脈とライン川により 南はアルプス山脈によって周囲より閉じ込められていた。紀元前61年 部族のうちで最も富裕なオルゲトリクスは王になろうという野望を抱き 貴族と陰謀を企てた。そして部族のものに自分らにとってこの領地はせますぎる いざ大挙して中原に出ようではないか 自分らは誰よりも武勇がすぐれているからガリア全部を征服し 号令するのはたやすいことだ と説き伏せた。そこで人々はお出立するのに必要なものをととのえ できるだけの駄馬と荷車を買い上げ 途中で穀物の供給にこと欠かないためにたくさんの種子を播き 近くの部族と仲をよくした。それには2年間で十分と思いい3年目に出発と法で決めた。……オルゲトリクスは(他の部族をも仲間に入れようとして) セークァニー族 ハエドゥイー族の有力者と内密に相談して 自分はやがて部族の支配権を握るから そのときには2人のために王位をとってやろうと確約した。2人ともその言葉に動かされて信義を誓い合い 王位をとった暁には最も強い3つの部族でガリア全部を支配しようと思った

(所がこの密謀は露見してしまった)。ヘルウェティー族は習慣によってオルゲトリクスを縛って理由を述べさせることにし もしそれで有罪となれば火刑に処せられるはずであった。しかし オルゲトリクスは裁判の日にはぼう大な人数の味方を召集して弁明せずにすませてしまふ。怒った部族の人々は武力に訴えても掟を護ろうとして人数を集める。騒然としたなかに オルゲトリクス自身が死体となって発見される。ガリア戦記では自殺の疑いがないでもないと言っている。……オルゲトリクスが死んでもヘルウェティー族はやはりその領地を出る決心を実行しようとした。そこで12個に上るすべての町400の村 そのほか個人の家に火をかけ 帰国の望みを残さずして断乎としてあらゆる危険を冒そうと穀物も携帯できるもの他はみな焼きすて 挽いた食糧を3カ月分ずつ持って紀元前58年3月28日に今のジュネーブに近いローヌ河岸に集結し…… やがて急ぎローマから駆けつけたシーザーのひきいるローマ軍と小せり合いをしながらローヌ河の上流より今のフランス南部リヨン近くに大挙して侵入する。

やがて両軍はリヨン北方150km いま Toulon-sur-Arroux と呼ばれる町の付近 Armecy の丘で決戦の日を迎える。……シーザーは部隊を Armecy の丘に引き上げ ……中腹に4個軍団で3重の戦陣を布いた。ヘルウェティーは ……方陣を組んで味方(ローマ軍)の第1の戦陣に迫った。シーザーはすべての馬を見えない場所に移し(背水の備えをしてから) 部下をはげまして戦いだした。兵士は高地から槍を投げて苦もなく敵の方陣をくずした。それをくずすと剣をぬいて切りこんだ。ガリア人の楯の多くは槍の一撃で破れてからげられ 槍の穂先の鉄が曲ってしまうとぬき取ることもできず 左手が不自由では思うように戦うこともできないので非常に困り ……むしろ楯を手から外して身を蔽うものもなく戦うようになった。やがて……約1マイルの距離にあった山に向けて退却し出した。

ヘルウェティーは降伏し シーザーは彼らに出て来たもとの土地へ帰ることを命じた。このとき 自ら家を焼きガリアに侵入したヘルウェティー族は 老若男女すべて40万に近かったが 本国に帰り得たもの 10万余であったという。

この後 スイスの住民は決して他国に侵寇しようとはしなかった。スイスはその後長い間ローマの属領となり 5・6世紀のゲルマン民族の大移動のとき大部分がアルマン族 ブルグンド族に占領された。これが今日のドイツ系 フランス系スイス人の起源となっている。



第7図 スイス地勢図。北より南へユラ山脈 中央低地帯（モラツヒ盆地） ヘルベチア・アルプス ペニン・アルプスの帯状構造がよくわかる。

ローマ時代のスイス人は東南の一隅に残り レート・ロマニス語を今日まで伝えている。これにアルプス南部のイタリア系スイス人（ラテン系）を加えて 三つの民族と四つの言語という 現在のスイスが形成されることになる。

ガリア戦記に語られていること 有力者オルゲトリクスの野望を粉碎した部族の強靱な抵抗 ガリア諸族の間でも とりわけ好戦的だったというヘルウェティーの血武勇にすぐれながら天険にさまたげられ発展できなかつ

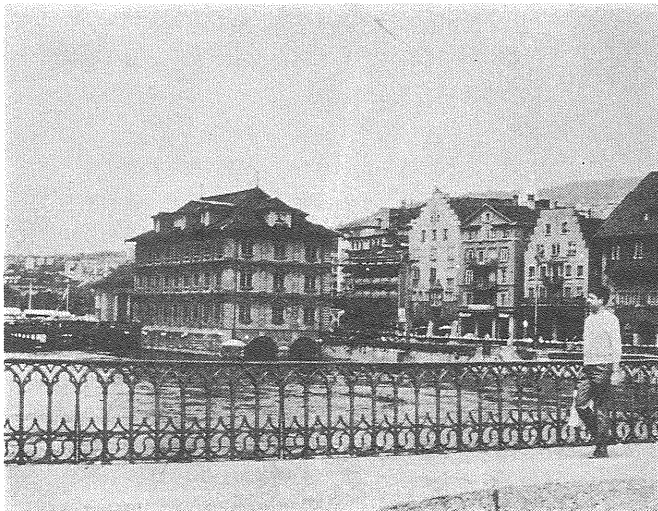
た人々は スイスのユニークな社会の根源がはるか古代まで遡り得るということであろう。

4 スイスの地理・気候

一般にスイスは3地形部分に分けられる。北からユラ 低地帯 およびアルプスである(第7図)。

主要な都市 産業はほとんど低地帯に集中している。この幅およそ60km 長さ300kmの範囲は いわばスイスの中心である。スイスの地理は氷河を抜きにしては語れない。最盛期には10指で算え得るわずかな高峯をのぞいてすべて厚い氷で埋めつくされたという。大きな町はいずれも湖か河のモレインの上に築かれている。チューリッヒはドイツ系地域の中心 チューリッヒ湖の北端にあり スイスの工業商業の中心地で人口(44万)もスイス

最大。ローマ時代にはトリクム(Turicum)と呼ばれ 今も町の中心にその砦のあとがある。これに対してジュネーブはフランス系地域の中心都市 チューリッヒが



第8図 チューリッヒの中央を貫くリマ川と その岸に今も残る中世のハンザ同盟時代のギルド・ハウス(陸揚げした商品の売買を行なった商館)。



第9図 チューリッヒ市北西上空から南東方向を望んだ航空写真。チューリッヒ市、チューリッヒ湖 ヘルベチアアルプスがよく見える。

第10図 東京・ジュネーブ気温比較

| | | 月 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|-------|-----------|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 東京 | 気温 (℃) | 最高 | 8° | 8° | 12° | 17° | 21° | 24° | 28° | 30° | 26° | 21° | 16° | 11° |
| | | 最低 | -1° | 0° | 2° | 8° | 12° | 17° | 21° | 22° | 19° | 12° | 6° | 1° |
| | | 平均 | 4° | 4° | 7° | 13° | 17° | 21° | 24° | 26° | 23° | 17° | 11° | 6° |
| | 降雨日数 | 7 | 8 | 13 | 14 | 14 | 16 | 15 | 13 | 17 | 14 | 10 | 7 | |
| ジュネーブ | 気温 (℃) | 最高 | -1° | 3° | 7° | 11° | 16° | 19° | 21° | 21° | 17° | 12° | 6° | 2° |
| | | 最低 | -2° | -2° | 1° | 5° | 10° | 14° | 16° | 15° | 11° | 6° | 2° | -2° |
| | | 平均 | -2° | 0° | 4° | 8° | 13° | 16° | 18° | 18° | 14° | 9° | 4° | 0° |
| | 降雨日数 | 12 | 13 | 13 | 15 | 15 | 15 | 14 | 13 | 12 | 12 | 12 | 13 | |

チューリッヒ湖にのぞむようにジュネーブはレマン湖の西端にありユラ山脈を背にした国際観光都市である。モン・ブラン橋からレマン湖を通して望む白雪のアルプス連峯はスイスの代表的な風景であろう。人口18万カルビンが宗教改革を唱えた地で中世には新教徒のローマといわれた。ベルンはジュネーブ チューリッヒのほぼ中央に位置する。ドイツ系地域に属するがこの地理的な理由などから 1848年にスイス連邦憲法が成立するや首府として選ばれた。人口17万 市の中心部は近世のスイス都市の形態がもっともよく保存されているといわれる。

ユラ山脈は最も高いところで1,400mに満たない小山脈であるが地形は急峻でフランス およびドイツとの自然の境界をなして来た。バーゼル以西ではゆるやかな南フランスの丘陵へいつの間にか移行するし 以東ではドイツのバーデンの黒い森 ハーシニアン¹の基盤をえぐった深い谷と蒼蒼たる森林にライン河を隔てて相対している。

アルプスは面積的に国土の南2分の1を占める。いうまでもなくスイス・アルプスは広義のアルプスの中央部にあり 多くの場合アルプスは すなわちスイス・アルプスを指している。そしてスイスの別名ともなっている。アルプスは西南西から東北東に走る1大山脈であるが ほぼその中央を走るローヌライン²渓谷によって南北に2分される。地質学的にいえば南部はヘニン帯であり 北部はヘルベチア帯である。スイス・アルプスの最高部は南部のモンテ・ローザ(4,634m) マッターホーン(4,477m)であるが 河川系の分水嶺をなしているのはローヌライン²渓谷の中央にあるサン・ゴッタルド山塊(3,000~3,200m)である。北部ではユングフラウ(4,158m) メンヒ(4,099m) アイガー(4,099m)などの高峯がある。分水嶺が地形的高地帯

からずれている理由については サン・ゴッタルド山塊が最も隆起しつつある地域であるとの解釈があり これは最近予備的に行なわれた水準測量の結果でも認められている。

スイス国民とスイスの地形に見られる多様性は気候の上でも同様である。第10図に東京とジュネーブの気温と降雨日数を比較して

あるが ジュネーブの気温は東京に比較して数度低く 降雨日数はほとんど同じである。これは低地帯全体に通じての天候といってよいであろう。低地帯の気候はいわゆる西ヨーロッパ型の気候である。これに対してスイス東南部のエンガディン(レート・ロマン語地域:ダボス・サン・モリッツなどの有名なスキー・リゾート地を含んでいる)地方は冬寒く 夏暑くという年間気温の差の大きい東ヨーロッパ型ないし大陸性の気候である。一方アルプス南麓の南スイスの気候は アドリア海沿岸諸国と同様で地中海型であり 冬季にも比較的暖かで晴天の日が多い。西南部のバレ(Valais)地方は気候的にスイスのスペインといわれ 乾燥した内陸の気候である。しかし このような統計的数字だけではスイスの気象の様相を表現することはできない。筆者の住んでいたチューリッヒ郊外ですら10月に入ると冬は駆け足でやってくる。春の花で野山が彩られる5月までの半年ガスとも氷雨とも雪ともつかぬものが 一面の視界を埋める陰うつな冬が続くのである。天気図が典型的な好天を示すときでも このアルプスの国のほとんどは低い雲の中に埋もれてしまって膚を射す冷気が漂う。このような時 1,000mか2,000m以上の山に上れば さんさんたる太陽が白銀の峯々を照らしているのだが。この日光不足の故にスイスでは くる病が非常に多い。建物のガラス戸はどこでも二重窓である。二重のガラス窓から幾日も続くガスとそれを通してぼんやりと映る牧場に働く農夫の姿を見るとき この貧しい土地を見限って 新天地に活を求めようとした 古代のスイス人の気持がよくわかるのである。

5 谷の住民—多様性と連帯感の起源

スイスはまた氷河の国でもある。最盛期にはわずかな高峯をのこして全国は厚い氷河におおわれていた。リス ヴィルム氷期のモレインはチューリッヒからユラ

山脈の南限にまでみとめることができる。したがってスイス国土は氷河地形の上にあるといっても過言ではない。この地形がスイスの人々の生活をしっかりと規制している。ここに主谷と副谷ということばがよく使われる。これは河川の本流と支流といってもよい。だが単純な枝分かかれ地形ではない。スイスを訪れる人は必ずベルナーオーバーランドか ツェルマットに行く。そして Lauterbrunnen や Mattertal のみごとなU字谷にまず驚嘆する。幅1~2km 高さ1,000m にもおよぶ巨大なU字谷は かつて氷河が両岸をえぐり おし出して行った跡である。このU字谷のところどころに滝がかかっているのを見るであろう。ユングフラウへの登山電車に乗って Kleine Scheidegg から Lauterbrunnen へと下りて行けば 必ず数百mもの大滝が両岸にいくつか観察されるはずである(11図)。それは日本ではどうも見てはならない偉観である。あるいはもっと下流にでてインターラーケンからブリエンクゼル湖に沿ってアール川を遡ってもよい。幅数km 長さ15kmにおよぶこのせまい湖の両岸はヘルベチア帯の石灰岩の見上げるばかりの懸崖である。同じ様に幾つかの高い滝が落下しているのが糸の様に眺められるであろう。このU字谷は日照りの悪い しかし静寂を潜めた谷である。住家も家畜もまばらだ。多くの観光客は神々の棲家の様に気高い高峯を仰いだのち いかにも日くありげな謎を潜めた様なこのような谷をのぞいて ああこれがアルプスの人々かとスイスをこれで見尽したと満足感を抱く。このような人はスイスの生活のほんの一部を見たのにすぎないのである。銀座通りを散歩しては日本を理解した気持になって帰って行く観光客の様に。

U字谷にかかる滝の彼方になにがあるのかとあえて想像する人はまれである。この滝が“副谷”への入口な

のである。高さ数百mから1,000mに達する懸崖のために登り口は峻しく かなり近づかなければ解らない。しかし幾重ものジグザグの道を越えると突然 下からは想像もできなかった意外に大きな 明るい谷が延々と長く長く続くのである。青々とひろがる牧場 高く空を衝く教会の塔 牛を追って彼方の道をゆっくりと下りて来る牧童たち それは主谷 U字谷の底からは想像もつかない世界である。

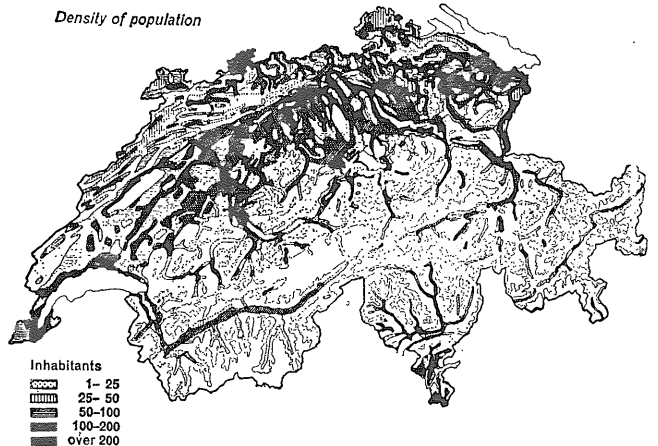
このような谷がスイス社会の単位になる。この事情は大都市を抱えた低地帯でも変わらない。第12図の人口密度分布を見て頂けばこのことを理解してもらえらるだろう。アルプスのU字谷から流れ下りた氷河は 北北東—南南西方向のまま ライン河やユラ山脈近くまで達し モラッセの地層をけずって多くの平行した氷河湖(チューリッヒ湖もその一つである) や谷を作った。これらの湖や谷に沿って村落が発達している。アルプスにあっては1つ1つの副谷がそれぞれ独立社会を作ってきた。主谷でも相当に大きくない限り それぞれに分断された閉鎖社会を作ることになる。コンミュンはアルプスでは1つ1つの小さな谷が基礎となって作られ 主谷や低地帯ではドラムリンやモレーンにより作られる小さな丘が基礎になって作られる。

谷と谷は互いに地形的にも社会的にも分離している。谷ごとに自給自足を原則とし それぞれ独自の財宝 伝説と歌を持ち 祭りや民族衣裳を保存している。スイス人にいわせるとチューリッヒの近郊ですら 谷ごとにわずかではあるが 長い間にも決して消えることのなかった独自の方言やなまりを持っているそうである。カーニバルやクリスマスなどに使う怪物の仮面もすぐ隣りの谷では違っているという事もまれではない。

スイス国民はだれでも必ずどこかのコンミュンに属



第11図 ベルナーオーバーランドの Lauterbrunnen の谷



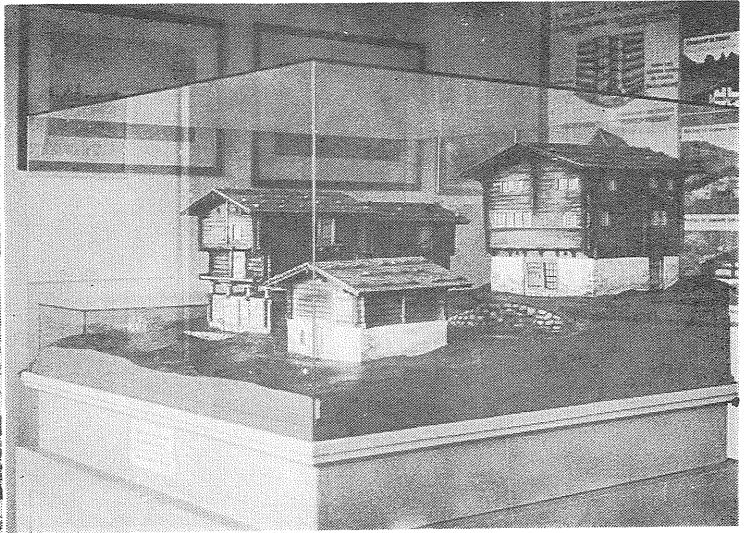
第12図 人口密度図 図の単位は1km² 当りの人口。

し このコミュニティのいろいろな問題に関する決定に参加しなければならない スイス国民はまず第1にコミュニティという国籍を持つ というスイス デモクラシーの基本は このような事情を抜きにしては理解するのに困難である。

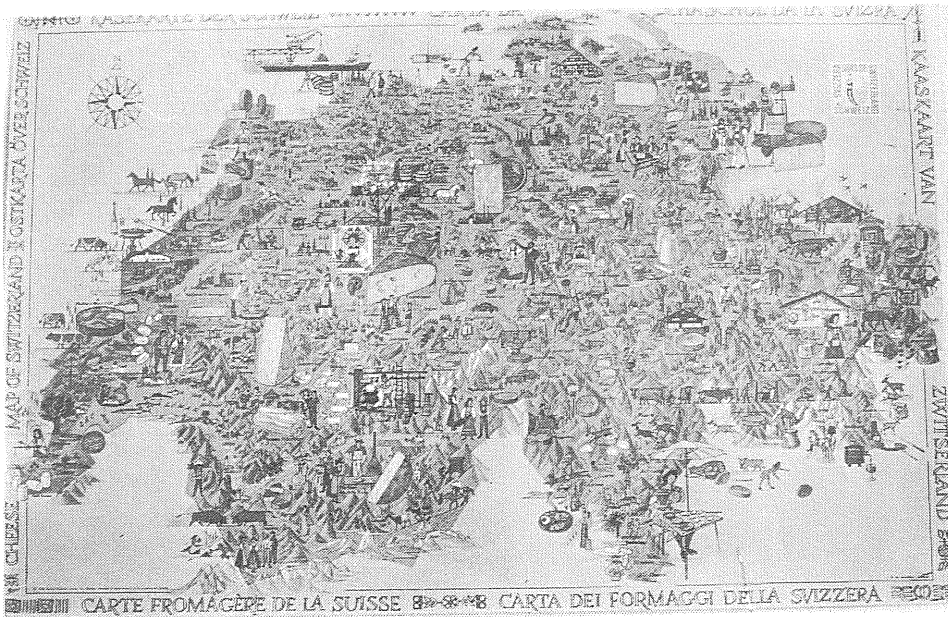
このような無数の谷を基礎にした生活が スイス社会の底辺に流れる多様性と共同意識感の原因となっているのである。 スイスを旅行する楽しみの最大なるものは

古い風俗 伝統がよく保存されていることである。九州そこそこの小さな国でこれほど variety に富んだ国はないだろう。 思いつくままにいくつか例を上げよう。

西のジュネーブ 東のチューリッヒは スイスのフランス系 ドイツ語系を代表する都市であり 中間のベルンはドイツ系に属する(第6図)。 チューリッヒからジュネーブに向かえば ベルンとローザンヌのほぼ中間でドイツ語からフランス語へ変わる訳だが その境界を抜けると街の中の看板類 道路標識などドイツ語からフラ



(A) 第13図 スイス各地の家屋様式の違い (A) と代表的様式の模型 (B).



第14図
チーズは日本の味噌と同じようにアルプスの住民にとって蛋白源として不可欠の食物。 せまいスイスの国でも非常に変化に富んでいる。

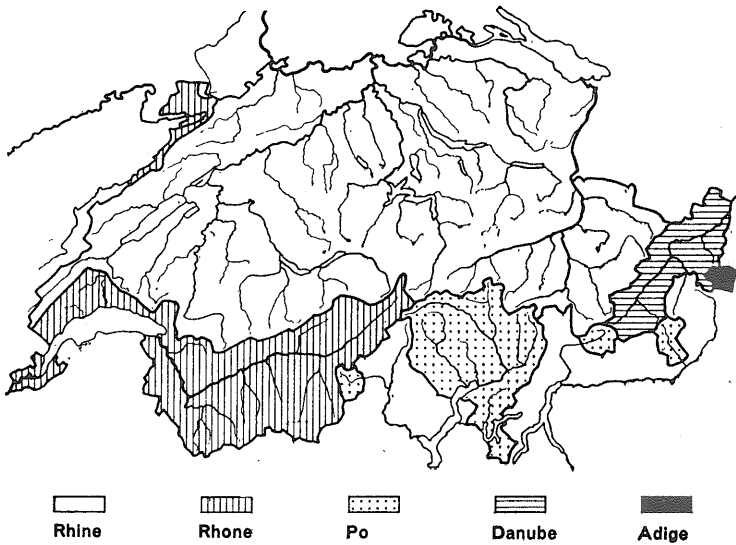
ンス語に変わる。たとえば Bank → Banque.

汽車がベルンを出発してジュネーブに向かう。ベルンを出て間もなく車掌が切符を見にやってくる。アレビリエット ピッテ(乗車券を拝見します)。ローザンヌに近づくと同じ車掌が今度はフランス語で トウ レビレ シル ヴ プレと乗客の間を廻る。

スイスの人が最も多く口にするのは チーズ サラミソーセージ ワインそしてパンである。最後のパンは例外的に全国共通で色の黒い お世辞にも旨いといえないパンであるが チーズ サラミは各地各地でそれぞれ少しづつ異なり 特色がある。ワインもフランス ド

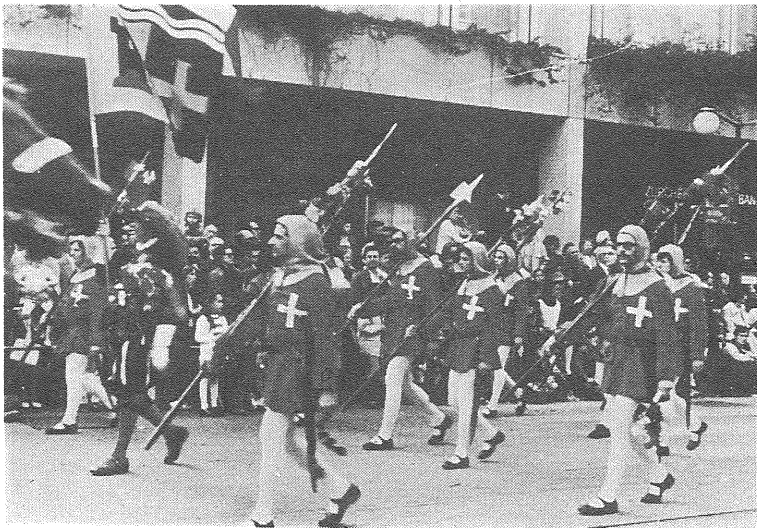
イツほどではないが 各地にそれぞれ地酒のようなものがある。谷の奥深くの村で特産のサラミ チーズを試みること 山歩きとはまた異なった楽しみである。

農家の造り 教会の塔の構造 屋根 壁の材料も地方地方で随分異なる。ベルンのアルパイン博物館には各地の農家の模型と展示がある(第13図)。単色なのでたとえばユングフラウ地域とルツェン地域との差はあまりはっきりしないかも知れないが この木造の壁の窓のふちなどに描かれる色彩模様などすべて地方ごとに多種多様である。あまり一般的な楽しみではないが 屋根壁に使われている石材をひそかに叩き 原産地を推理するのは地質屋の秘めごとというべきか。

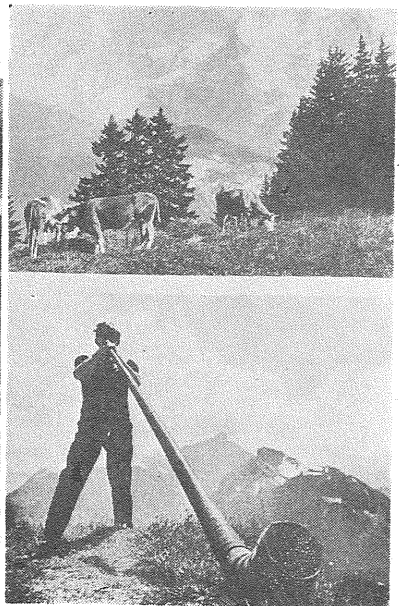


第15図 スイスの河川流域分類 左よりライン川(ドイツへと流れ下る) ローヌ川(フランスへ) ポー川(イタリアへ) ダニュブ川(オーストリーへ) アジ川(南チロルへ) 河川地域

お祭りの多いこと 日本並みである。カーニバルは2月から3月にかけて各地で行なわれるが その出し物は意外と土俗的である。湖水地方では日本のエビス様のような魚つりの神様如きものが現われるし ワインの美味しい所はブドウを形どった飾りをつける等。春の到来を告げるというチューリッヒの六時の鐘祭 秋にルガノなどで行なわれるブドウの収穫祭 11月にベルンで行なわれる玉ねぎ市 12月のジュネーブのはしご競技など季節季節の有名なお祭りも多い。



第16図 チューリッヒのカーニバルのパレード。



第17図 アルプ(高原の牧場の意)とアルペンホルン。

このようなスイスのローカル カラーも道路の発達と共に年々失われつつあるといわれている。自給自足は道楽や楽しみでやっているのではなく 地形上やむなくそうなったのだから 世の中全般が開けてくればスイスとても例外ではあるまい。あと10年たつとスイスも面白くなくなるとよくいわれる。アッペンツェル グラウビンゲンなどスイスの北上山地ともいうべき地方でも筆者がいた2年の間にすら目に見える変化があった。古いスイスにあこがれる人は急いだ方がよいだろう。

6 アルプスの語源—ホルンの響き

辞書(相良 独和辞書)によれば Alpe あるいは Alp はケルト語に由来しており もともとは複数で使われ die Alpen として高山の牧場を意味する。またこれが男性名詞 der Alp となると悪霊 魔神などを意味する。事実 スイスの山地は万年雪のある所 急傾斜で岩盤の露出している所をのぞいてすべて牧場である。あまりの高地では冬になると牛を下げ 春に再び山に上げる。ここでヒュッテというのは夏に高地で牛を放し 乳を取る人のために作られた石室のこののである。山ですれ違う牧人の面だちは意外に端正である。しかし おしなべて厳しい表情とシワが多いために大学で見かける誰よりも哲学者然としており “教授”らしい。厳しい自然環境の下で生活しなければならぬ立場から 自然と戦うよりも 自然の中にとけ込み 自然と一体となって家畜を育てて行くという感じである。アルプスではチーズや乳は自給できるが 畑に乏しい。クル病がこの

国に多いということ それは日光の不足が原因であると書いたが このような食生活にも一因があるのかも知れない。このためか スイスの人は菜園作りに異常に熱心である。高層アパートの住人ですら雪が融けると共に 3坪の菜園を作っては “自給自足” に努める。高原の冷氣をつんざいて響くホルンこれは今ではまれにしか聞けないがと 牛の鈴の音は陽気で明るく その音は時には 長い歴史時代のへんせんを通じてヨーロッパの僻地 アルプスの国を守りながら 谷々にひそみ住んできた牧人の憤りの声かと感じられるときがある。数メートルもあるホルンの音は溪谷にこだまし 岩壁にこだまして誇張なしに信じられないほどの遠方にまで響く。だからホルンを奏る人を見ることのできた人は幸運である。ホルンの音は牧場の人々や家畜から山の悪霊を追い払うために吹くのさという。アルプスの人々が心で描く悪霊の仮面は奇妙なことに日本の雪国で作られているという仮面そっくりである。

(筆者は 燃料部 現在スイス留学中)



●地質調査所中国出張所は去る4月15日下記へ移転しました

移 転 先

広島市上八丁堀 6 番30号 広島合同庁舎 3号館 1階

地 質 調 査 所 中 国 出 張 所

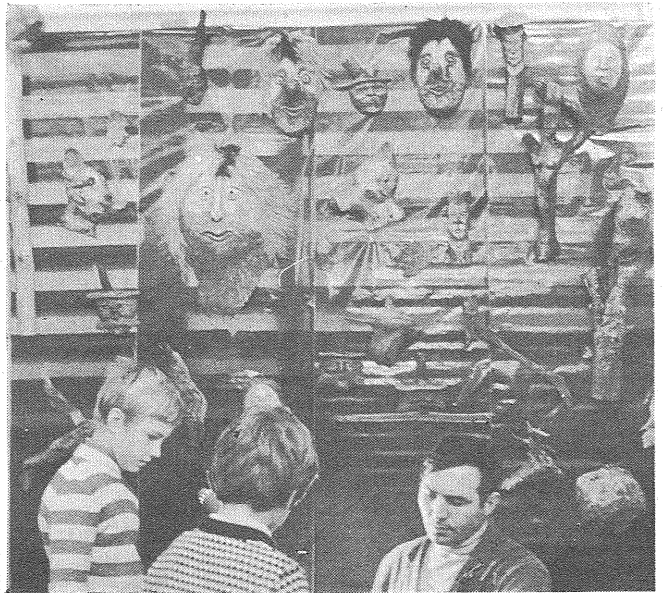
☎ (0822) 21-1945

交 通 広島駅 宇品・己斐行 「立 町」下車 徒歩 約8分
電 車

広島駅 宇 品 行 「紙屋町」下車 徒歩 約8分
バ ス



第18図 イースター(復活祭)はヨーロッパでは春の訪れの告知である。アルプスの山深い谷では今も形相おそろしい面をつけて冬の間山に棲みこんで悪霊を追い払う祭を



第19図 祭の仮面はありふれた町のマーケットでも売られる。